小特集・普賢保之先生退職記念

普賢保之先生年譜・著述目録等

◆年譜等

昭和五六年四月　龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻　修士課程入学
昭和五八年三月　龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻　修士課程修了（修士）
昭和五八年四月　龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻　博士課程入学
昭和六一年三月　龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻　博士課程退学
昭和六二年四月　龍谷大学非常勤講師　平安高校非常勤講師（平成二年三月迄）
平成二年四月　浄土真宗教学研究所助手
平成六年四月　浄土真宗教学研究所講師　中央仏教学院講師
平成七年四月　京都女子大学非常勤講師（平成一八年迄）
平成一一年四月　龍谷大学文学部特定任用講師
平成一四年四月　龍谷大学文学部特定任用助教授
平成一七年四月　龍谷大学文学部特別任用教授
平成一九年四月　京都女子大学文学部教授

平成二〇年四月　京都女子大学宗教部長（平成二三年三月迄）
京都女子大学宗教文化研究所所長（同前）
平成二八年四月　京都女子大学宗教部長（令和三年三月迄）
京都女子大学宗教文化研究所所長（同前）
令和二年二月　本願寺派勧学を授与される
令和三年三月　京都女子大学定年退職
令和三年五月　京都女子大学名誉教授

◆著述目録

学術論文

〔単著〕

真俗二諦の研究　「真宗研究会紀要」一七号　一九八四年三月
親鸞聖人をめぐる社会的実践論―現世利益和讃を縁として―　「真宗研究会紀要」一九号　一九八六年三月
信と社会的実践　「印度学仏教学研究」三四　一九八六年三月
親鸞聖人の即得往生について　「龍谷大学大学院紀要」八集　一九八七年三月
往生について　「印度学仏教学研究」三六　一九八七年一二月

親鸞における往生義	「真宗研究」第三三輯	一九八九年一月
弥勒等同思想の研究	「印度学仏教学研究」三八	一九八九年一二月
「如来とひとし」について	「宗学院論集」六二	一九九〇年三月
還相回向と常行大悲の益	『親鸞と人間』（「―光華会宗教研究論集」第二巻）	一九九二年四月
親鸞における八番問答の受容	「印度学仏教学研究」四一	一九九二年一二月
「如来とひとし」について―特に『末燈鈔』第三通の解釈をめぐって―	「教学研究所紀要」二	一九九三年三月
蓮如と真慧	「印度学仏教学研究」四三	一九九四年一二月
曇鸞における八番問答の意義	『曇鸞の世界』（論註研究会編）	一九九六年一月
『十六問答記』の性格	『蓮如』（教学研究所）	一九九八年三月
真慧上人の教学的特徴	「真宗研究」四四	二〇〇〇年一月
「行巻」における称名破満釈の位置	「龍谷大学論集」四五六	二〇〇〇年七月
中山寺本和讃の特徴（発表要旨）	「真宗学」一〇三	二〇〇一年一月
「讃阿弥陀仏偈和讃」の意義	『龍谷大学善本叢書』二一	二〇〇一年三月
浄土真宗における年回法要の意義について	「教学研究所ブックレット」	二〇〇一年三月
念仏往生の意義	「真宗学」一〇五・一〇六	二〇〇二年三月
存覚の念仏往生説	「真宗学」一〇七	二〇〇三年一月

小特集・普賢保之先生退職記念

存覚における教学的特徴―『持名鈔』・『女人往生聞書』・『破邪顕正抄』について―　「龍谷大学論集」四六二　二〇〇三年七月
親鸞の如来観　「真宗学」一〇九・一一〇　二〇〇四年三月
真宗における「いのり」の意義―法然・親鸞の用例を通して―　「真宗学」一一一・一一二　二〇〇五年三月
真宗から見た祈り　「日本仏教学会年報」七〇　二〇〇五年九月
法然における謗法理解　「龍谷大学論集」四九六　二〇〇七年一月
覚如における信因称報の意義　「真宗研究」五三　二〇〇八年一月
存覚と『選択集』　『龍谷大学善本叢書』二七　二〇〇九年三月
親鸞における経典観　『経典とは何か（一）―仏説の意味―』（日本仏教学会編）　二〇一一年九月
覚如上人における法然聖人・親鸞聖人の受容　『『教行信証』の研究』二　二〇一二年八月
浄土真宗における自死の問題　「真宗研究」五七　二〇一三年一月
法然教学の伝承　「真宗研究」六〇　二〇一六年一月

〔共著〕

『末燈鈔』の書誌学について　『龍谷大学善本叢書』一二　一九九三年三月
今、浄土を考える（勧学寮編）　本願寺出版社　二〇一〇年五月
『浄土和讃講義』の翻刻　「研究紀要」二七　京都女子大学宗教・文化研究所

『浄土和讃講義』の翻刻（二）　「研究紀要」二九　京都女子大学　宗教・文化研究所　二〇一四年三月
二〇一六年三月

著書

〔単著〕

尊号真像銘文講読　永田文昌堂　二〇〇六年七月
花梨　本願寺出版社　二〇〇九年四月
本当の幸せとは　永田文昌堂　二〇〇九年九月

〔共著〕

新編安心論題綱要（勧学寮編）　本願寺出版社　一九八二年五月
浄土三部経と七祖の教え（勧学寮編）　本願寺出版社　二〇〇八年七月
親鸞聖人の教え（勧学寮編）　本願寺出版社　二〇一七年四月

その他

〔単著〕

いのちの栞　本願寺定期刊行物　二〇二一年三月

〔共著〕

小特集・普賢保之先生退職記念

お盆	本願寺定期刊行物	二〇二〇年七月
秋彼岸	本願寺定期刊行物	二〇二〇年九月
報恩講	本願寺定期刊行物	二〇二〇年十一月
春彼岸	本願寺定期刊行物	二〇二一年三月

女子大國文　第百六十九号　令和三年九月三十日

退職して思うこと

普賢保之

今年三月三十一日を以て定年を迎えました。よく知り合いの方から退職して寂しくはありませんか、と尋ねられます。しかし、寂しいという感情は湧いてきません。それよりも安堵感の方が勝っています。退職後一週間は睡魔に襲われ、毎日昼寝などして過ごしました。

私は徳永道雄先生の後任として京都女子大学に着任しました。徳永先生は今では数少ない所謂名物教授でした。ドスのきいた低い声で魅力的な講義をされるため、沢山のファンがいた一方で、先生の声に怯え単位取得を一年先延ばしにして、私が担当するクラスに登録する学生も少なからずいました。着任当初は徳永先生の声に怯える子羊たちの受け皿になっていました。

国文学科の学生は本学の象徴的な存在という印象を持っています。大人しくて何事にも真面目に取り組み、受講態度も良く、礼拝の時間でも真面目に仏参に臨み、私が注意する場面は殆どありませんでした。寧ろ学生達の態度に感心させられることが多かったように思います。それは授業アンケートにも反映されていました。建設的な意見はあっ

ても、私を誹謗中傷するような内容のものは殆どありませんでした。この件をある国文学科の卒業生に話すと、「私は授業アンケートではどの先生にも全て、評価5に丸を付けました。受講する側が先生を評価するものではないと思っています。」と話してくれたことが印象に残っています。最近、教育はサービスだと考えている人もいますが、私は教育がサービスだと言われることには些か抵抗があります。私が学生時代の話です。ある先生の講義はいつも教室が一杯になり、立って受講する学生もいました。先生が優しかったからではありません。近寄りがたくて威厳のある先生でした。その先生の講義を聞きたくて他大学からもやって来る程でした。ある日の講義後、前列に座っていた学生が先生の所に質問に行きました。私も近くでその様子を見ていました。学生の質問を聞いた先生は一言「君は勉強していないから、そんな質問をする。勉強してから質問に来なさい。」と一蹴されました。先生の言葉に抗議する学生は誰一人いませんでした。むしろ皆、気の引き締まる思いをしたのではないかと思います。今から五十年近く前の話ですが、私はここに大学教育のあるべき姿を見る思いがします。

日本浄土教の樹立者と仰がれる源信僧都は、その主著『往生要集』の中で、「雨の堕つるに、山の頂にとどまらずしてかならず下れる処に帰するがごとし。もし人、驕心をもつてみづから高くすれば、すなはち法水入らず。もし善師を恭敬すれば、功徳これに帰す。」と記されています。この言葉は様々な場面に通じるのではないでしょうか。自分を高くすれば、どんなに素晴らしい先生との出遇いがあっても、先生の話す内容は自分の中には入ってきません。自身をどの場所に置くかによって、吸収できるものもできなくなってしまいます。自身を高く位置づけて耳を傾けなければ、今後の人生においても同様のことを繰り返してしまうことになります。それは自分にとって大きな損失です。

私は着任して三年目頃から体調を崩し、発声がままならなくなりました。もともと大きな声で、しかも早口で喋る方でしたが、徐々に発声がままならなくなりました。ある日の講義は、特に発声がままならず、絞り出すように声を

出していました。そこで受講生に、「聞き取りにくいところがあれば、講義終了後に各自質問を受付けますので、私の所まで来て下さい。」と伝えました。するとひとりの学生が、講義終了後提出した出席カードに次のように書いてありました。「私たちは先生の元気な頃を知りません。声を出しにくそうに話すのが普賢先生だと思っています。先生がおっしゃるほど聞き取りにくくはありませんし、内容も理解もできます。」とありました。何とも有り難い言葉でした。涙が出そうなほど嬉しかったことを覚えています。体調を心配して下さった先生方からも、さり気なく言葉をかけていただきました。元気な頃と変わりなく接していただいたことは大変有り難いことでした。

国文学科の先生には、毎年必ず宗教文化研究所主催の懸賞論文の審査をお願いしています。お忙しい中、いつも快く引き受けていただきました。私も審査に加わっていたときのことですが、国文学科の先生と評価がほぼ一致したことが二回ほどあります。専門は違っても着眼点は同じなのだと思いました。ある先生から、その年最高の評価を貰った学生の論文について、「私にはあんな宗教論文は書けない。素晴らしい感性だ。」とお褒めの言葉をいただいたことがあります。我がことのように嬉しかったのを覚えています。

卒論試問も印象に残っています。私はゼミ担当者ではありませんでしたので、副査として試問に当たりました。ゼミの先生によって、学生の雰囲気が違うのも興味深いことでした。ある先生は、学生の取り上げた作品に、ご自身も興味を示され「私はこう思うんだけど君はどう思う?」と嬉しそうに語りかけておられた姿が印象に残っています。色々なタイプの先生がいらっしゃいます。それは先生方の個性です。学生の皆さんは恵まれた環境の中で講義を受け、卒論にも取り組むことができます。真摯に取り組めば取り組むほど、そのことに気づかされるのではないでしょうか。

退職後の生活は早朝に起床し、来年五月までに書き上げなければならない専門書の作成に取り組んでいます。在職中とは違い、自分の仕事だけに集中できることに感謝しています。またこれまでに書き溜めた原稿をもとに、異分野

の先生とコラボして一冊の本に纏める話も進んでいます。

学業に打ち込める贅沢な時間は、今後恐らく持つことはできないでしょう。今、与えられた時間を大切に過ごして下さい。私も残された時間を自分のために大切に使いたいと思っています。もしそれが人の役に立つようなことがあれば、それはそれで大変有り難いことではあります。先生方を初め多くの方々のこれまでのご厚意に心より感謝申し上げます。

（本学名誉教授）